

体験活動の充実をめざす経営力とは

上越教育大学大学院 木村吉彦

1 特色ある学校経営

新潟県上越市立高志小学校では、生活科や総合的な学習を教育課程の中核に据えた学校経営が行われている。そこでは必然的に「体験活動の充実」をめざす実践とそれを支える学校経営が行われている。今回、高志小学校の小松隆校長先生に取材を行い、体験活動の充実をめざす経営力とは何かについて、共に考える機会をいただいた。

体験活動の充実をめざす経営の前に、その前提となる高志小学校の学校経営の全体像を示しておこう。

高志小学校の学校目標は、「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」である。いわゆる「方向目標(一般目標ともいう)」のみを設定し、この目標に基づいて実践を行い、実践の中に見られた「生き生きと学ぶ子ども」の姿を出し合い、その姿をもたらした教師の働きかけや手だてについて確認・検討し、教師一人一人の実践に取り入れることで、それぞれの実践改善を行う。このような「羅生門的アプローチ」に基づく教育課程改善と教師の力量形成をめざしている。

「羅生門的アプローチ」に基づく具体的な方策とはどのようなものであろうか。まず、毎週提出するレポート(A4 1枚)と週1度のワークショップ開催がまず挙げられる。各自が行った実践あるいは他者の授業参観の感想等を書き出し、その書き出された内容について忌憚のない意見交換を教職員全員で毎週定期的に行っている。

また、3つの「そうい」(年度当初の「相違」・年度途中の「創意」・年度末の「総意」)に基づく教育課程編成を行っている。詳細は、末尾に挙げた高志小学校の本を参照してほしい。

これらの学校運営のねらいは、各先生方の「主体性」と「同僚性」の育成である、小松校長先生は語る。

次に、学校経営として心がけているのは、「先生方が子どもと向き合える時間的ゆとりを創る」ことである。高志小学校では、職員会議は年度当初2回しか行われない。また、校務分掌の数をなるべく少なくし、一人一務を基本としている。校務を極力減らすことによって先生方が子ども達と向き合える時間を持てるように配慮している。このような、ユニークな学校運営のあり方は、二代前の長野克水校長先生によって確立された。それ以来、高志小学校では「すべては子どもたちが生き生きと学ぶために」教職員が一丸となり努力している。この学校運営に対して、本年度博報賞及び文部科学大臣賞(博報児童教育振興会)が与えられた。

2 体験活動の充実をめざす学校経営

人的条件

体験活動の充実を図るためには、まず先生方のやる気を引き出し、かつ尊重しなければならない。「相違」教育課程の段階で先生方の年間計画はわかるので、校長先生は、外に

出て行く体験や活動を原則としてすべて認めることにしている。そのとき、何かあったときの最終責任は校長が取る覚悟であることを各担任に伝える。もちろん、安全管理や危険回避の手だてについてはしっかり確認する必要がある。そして、最低一回は、その活動に校長も同行するようにしている。最終責任は校長が取ることを明言することで先生方は、やる気を引き出されると同時に与えられた自由の大きさと責任の重さを再認識する。先生を育てることは、担任が児童を育てることと同じであると校長先生は語る。そのときの基本姿勢は「ほめること」である。学校経営の基本は、教育の基本と同じなのである。

物的条件

体験や活動の充実を図るためには、施設や設備、それを支える財政的裏付けが必要である。高志小の場合、施設は充実しているが、ヤギのえさ代、畑の土壌整備・肥料代等々、子どもたちの体験活動を支える費用が必要である。校長先生としては、費用捻出のために、民間・反民間の教育研究助成費の情報をたくさん集め、財政の確保に努め、先生方に心配をかけないようにしている、という。

保護者の理解

昨今の「学力低下論」などの横行にも鑑みると、体験活動の充実を図る学校経営には、保護者の理解が不可欠である。高志小学校では、実際に保護者の方に学校に来ていただき、子どもたちが生き生きと活動している姿を直接見ていただくことを心がけている。我が子が夢中になって活動している姿を目の当たりにすることで保護者は、学校の支援者になることを快く引き受けてくれる。一方で、学力及び生活力調査の結果についても、保護者に情報開示し、高志小学校の子ども達が「学力」において全国平均よりも高いことを示した。特に、B学力のレベル相当高いという事実を述べ、保護者からの「体験活動重視」の学校方針に賛同安心してもらうことができた、という。

さらに、保護者の理解を得るのに貢献しているのが、「体験したら書く」という学習習慣を子ども達が身に付けていることである。高志小では、1年生の時から、活動の後には必ず作文シートに今日の活動を書き出すことを指導している。そして、作文は機会あるごとに保護者に読んでもらっている。保護者は、例えば、文字が見る見る上手になっている子どもの姿、作文の量がどんどん増えている事実から、子どもの国語力(=基礎学力)の高まりを実感する。体験がたんなる活動で終わらず、直接学習に結びついていることへの理解を示してくれている。

子どもとの直接的なやりとり

最後に、校長先生は毎朝、登校してくる子ども達に声をかける。子どもの持ち物を見れば、今日が体験活動の日であることはすぐわかる。そこで、「弁当、忘れてないね?」とか「へ行くんだね」などの言葉がけにより、子ども達のやる気を直接引き出そうとしている。ここに、校長先生であろうとも、「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」を具現しようとする教師としての基本姿勢が表出されている。

参考文献

- ・上越市立高志小学校『脱ピラミッド 超研究開発』(2002)
- ・高志小学校『そうい 超研究開発 ゆらぎのクリエイション』(2006)